

親和的關係における否定的評価

—日・韓の話者の話し方とFTA補償行為に注目して—

林 始恩

キーワード：否定的評価、冗談、フェイス、FTA補償行為、メタ・メッセージ

1. はじめに

親しい友人同士の関係では、けなしや冗談、悪態などで、相手に対して否定的評価を行うこともあるだろう。親和的な関係での悪口や冗談などが、親近感の表しであり、お互いの友好的な雰囲気形成に役立つことは、先行研究(中山 1995)でも指摘されている。しかし、親しみを表すつもりで行ったものであっても、否定的評価の場合は、発話の状況や話し方により、相手のフェイスを傷つける可能性がある。さらに、お互いの表現認識が異なる異文化場面では、ミス・コミュニケーションを引き起こす可能性がより高くなるだろう。

このように、友人同士で相手の否定的評価を行う際には、親近感の表明と相手への配慮という二つの要素が共存し、これが表現の仕方にも影響する。本稿では、日本人と韓国人が否定的評価を発する際の表現の仕方や、否定的評価を発した後の行為を分析し、両国の言語行為の相違点を明らかにすることを目的とする。実際、各々の母語話者同士の会話を収集し、日・韓の話者が否定的評価の発話をする際、どのような工夫を行っているのかを分析する。また、否定的評価を行った後、話者がFTA補償行為を行っていることに注目し、日本語母語話者と韓国語母語話者のFTA補償行為の仕方についての比較を行う。

2. 先行研究と本研究の立場

2.1 否定的評価・けなしに関する研究

山路(2005)では、「ほめ」や「けなし」のような、<相手を評価する発話>を「発話意図(親和的意図か攻撃的意図か)」「伝達内容(実際に伝えようとしている評価が肯定的なのか否定的なのか)」「発話内容(形式上の評価が肯定的なのか否定的なのか)」の3つの軸で分類し、小説からその談話例を提示している。

関崎(2010)は、「否定的評価」について「会話の相手やその行動、発話、認識、および、相手が行為を抱いている人物、ものごとに対して、否定的な評価を述べる行動」と定義し、日本語母語話者の大学(院)生の会話に現れた否定的評価の「対象」を分析した。その結果、「行動」「思考」についての否定的評価が多かったが、「外見」や「才能」などについての否定的評価は少ないことがわかった。関崎はこれらの頻度をフェイスの侵害度と関係づけて分析している。

以上のような研究があり、否定的評価の発話意図や、否定的評価の対象の頻度について明らかになっているが、否定的評価に関する研究はまだ少ないと思われる。特に、親しい友人同士の会話で出現する否定的評価は、その伝え方やコミュニケーションの仕方の特徴があり、さらなる分析が必要である。そこで本稿では、ポライトネス理論のFTA 補償行為を踏まえた上、ポライトネスの観点から否定的評価の話し方や補償行為について分析する。

2.2 FTA 補償行為について

Brown & Levinson (1987) によれば、人間には、他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない「ネガティブ・フェイス」と、他者に受け入れられたい・よく思われたい「ポジティブ・フェイス」の二面的なフェイス(face)を持つという。そして、このようなフェイスを侵害する行為を「フェイス侵害行為(Face-Threatening Act: FTA)」と呼んだ。「ポライトネス」とは、会話の場において表現・伝達される、主として相手のフェイスを侵害することに対する軽減的・補償的な言語配慮のことであり(滝浦 2008)、一般的に、話し手は、相互行為の中で、相手のフェイス侵害度を軽減するために、様々なポライトネス・ストラテジーを使用している。

一方、Zajdman(1995)では、「humorous FTA」について論じていて、FTA が笑いを誘発し、ユーモアのために遂行される場合、一般的な FTA の場面とはそのストラテジーが異なることを述べている。例えば、冗談のようにユーモアがある行為を行う時には、話し手は多くの場合、FTA を軽減する努力をしないことを指摘している。

しかし、話し手がユーモアとして FTA を行ったとしても、聞き手が冗談として受け止めず、侮辱感を感じる場合も存在する。このようなミス・コミュニケーションを防ぐため、話し手は、現在行った否定的評価が「冗談・遊び」であることを示す行為を行ったり、否定的評価を補償する行為を行ったりする場合もある。

本稿では、否定的評価を行う際、それが冗談で言っていることを示すストラテジーや遂行した FTA を補償するための行為について、実際の会話例から分析する。そして、FTA 補償行為からみられる日・韓の話者の言語行為の相違点を考察したいと思う。

3. 会話資料の概要

本稿では、ごく親しい友人同士の間で行われた会話を資料としており、日本語母語話者同士 4 組¹と、韓国語母語話者同士 5 組²の会話を分析の対象とした。会話参加者の年齢は、20 代前半から後半までであり、全員大学生・大学院生である。会話参加者には「相手の第一印象について」「相手のくせについて」という話題を提供し、その話題について 15 分程度、話し合うよう依頼した。9 組の録音時間は、126 分であり、否定的評価の発話と判断

¹ 男・男ペア 2 組、女・女ペア 2 組

² 男・男ペア 2 組、女・女ペア 2 組、男・女ペア 1 組

された文は、197 文である³。以下の表 1 は、各々の発話量を表したものである。

【表 1】日本語母語話者と韓国語母語話者の否定的評価の発話数

	日本語母語話者	韓国語母語話者
会話資料分量(時間)	63 分(4 組)	63 分(5 組)
否定的評価の発話数 ⁴	99	98

4. 分析と考察

4.1 発話時の話し手のストラテジー

4.1.1 韻律操作

否定的評価を冗談で行う時、話し手は、声の大きさを変えたり、話すスピードを変えたり、音質を変えたりするなど、韻律を操作する現象が観察された。例えば、次の会話例 1 では、J2 が J1 の普段のくせについて述べる場面である。J2 は、J1 が笑う時、眉毛の形が八の字になるというおかしげな様子を指摘している。相手のマイナス面を指摘する行為であるが、01 行から 03 行まで、文を短く切って、語尾に「ね」を入れることによって、リズムカルな口調で話している。話し手のリズムカルな口調により、発話の内容を深刻に言っていることではなく、ふざけた感じで言っていることを演出している。

[会話例 1] くせ

01 J2: → でもくせね。ポッチのね、くせはね::

02 J1: うん。

03 J2: → なんかね、変なときに笑うとね、眉毛がこう八の字になる。

04 J1: hhhhhh

4.1.2 感情や程度の誇張

また、おおげさな感情表現やマイナスの程度を誇張することも、ユーモアとしての FTA でみられるストラテジーである。次の会話例 2 は、会話例 1 の続きの会話であるが、眉毛の八の字になる程度がすごいことをさらに述べている場面である。J2 は、J1 の眉毛の八の字の程度に対して、富士山ぐらいだと誇張して述べている。J1 がそれについて否認すると、「ほんとに」を何回も繰り返して強調しているのがみられる。

[会話例 2] J1 の眉毛

25 J2: → すごいよ、もう::

³ 否定的評価の定義は、関崎(2010)にしたがって定義したものであり、否定的評価の発話の判定においては、日本語母語話者 1 名と韓国語母語話者 1 名に協力してもらった。

⁴ 杉戸(1987)の定義に従い、一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続(笑いや短いあいづちを含む)で、他の参加者の音声言語連続とかポーズにより区切られる単位としてみた。

- 26 J1: ほんと？
27 J2: → もう富士山ぐらい
28 J1: それは言いすぎだと思う。
29 J2: → いや、ほんとにほんとにほんとに。

韓国語話者の会話でも、相手に対する残念な感情をわざと何回も繰り返し、おおげさに言うことによって、その内容を本気で言っているのではなく、遊びのような雰囲気を作り出す様子がみられた。

ポライトネス理論では、相手のマイナス面を述べるときは、FTA を軽減するために、マイナスの程度を和らげるようなストラテジーを使用することが指摘されているが、今回のようなインフォーマルな場面で、ユーモアを目指し、否定的評価を行う場合は、マイナスの程度を過剰に述べ、おもしろみを増すようなストラテジーも使用されている。

4.1.3 笑い

否定的評価を述べる際、笑いながら発話を発したり、発話の前後笑いを加えたりすることで、雰囲気を緩和するストラテジーもよく使用されている。会話例 3 は、J2 が普段研究室の机を汚く使っていることについて話す場面の続きである。J2 の 01 行の発話「家は、以外と研究室よりきれい」に対して、04 行で、「しっかりしたほうがいいんじゃない」と相手の発話に対して警告を発するという否定的な反応を示している。発話の前後に笑いを加えることで、おもしろがっていることを表し、雰囲気を和らげている。

[会話例 3] J2 の家

- 01 J2: あ、じゃ俺はその逆かもー。僕はね hh 家はね、以外と研究室よりはきれい。
02 J1: hh[hh
03 J2: [hhh
04 J1: → それしっかりしたほうがいいんじゃない？ hhh

ただし、笑いについては、笑いの主体がその状況や相手によって自然に笑っているのか、あるいは話し手が演出して笑っているのかなどの機能や区別について、さらなる考察が必要であろう。

このように、否定的評価を発する際、話し方を変えることは、今発している否定的評価が冗談で行われていることを示すメタ・メッセージになっている。その他、大津(2007)では、冗談を話す際、若い女性が老人のような話し方に変えるなど、借り物スタイルシフトもみられると指摘している。

4.2 否定的評価後の FTA 補償行為

4.1 節では、否定的評価を行う際の話し手の話し方に焦点を当て、その戦略を分析した。しかし、FTA を軽減する試みは、一連の発話群のみを切り取って解釈できるのではなく、談話全体を視野に入れ、その展開に沿ってポライトネスのあり方をトータルに捉えることが必要である(三牧 2008)。4.2 節では、話し手が否定的評価を行った後、相手のフェイスを補償するために、ある行為が行われるところに注目し、日・韓の会話例からその行為を分析した。以下がその行為の種類である。

(1) 否定的な側面に肯定的な面もあることを述べる

相手に対して否定的な側面を話した後、そのような否定的な面に肯定的な面もあることを言及し、マイナスの程度を和らげる行為である。

例えば、次の会話例は、J1 が J2 の「声がでかい」と指摘した後、その感想を述べる場面である。初めは声大きいことをからかうように指摘しているが、その後 13 行目からは、「いいことだと思う」と言い、プレゼンテーションの時などは、声大きい方が有利であることを取り上げている。このように、マイナスのところをプラス方向に転換しながら、直前に行った FTA を緩和している様子がみられる。

[会話例 4] J2 の声の大きさ

01 J2: もう声でかいていうのはもう昔から=

02 J1: =昔からね。そう、わかりやすいよね。

(中略)

06 J1: → 俺はね、あ:この人ほんとに声大きな:って思ったのは::Tちゃん(J2のあだ名)、とあと中国人全般だよね:

07 J2: あ:::[そうやね:::[んん

08 J1: [hhh [旅行行ったときに::マジこいつら声でけえな

09 J2: hhhhhh

10 J1: もう二回ぐらいhh

11 J2: なるほどね。

12 J1: うん。

13 J1: → いや、いいことだと思うけどね、特にプレゼンの時とかね。

(2) 相手の立場から弁解する

相手の否定的な行動や性格について述べた後、取り上げた行動や性格に対して、相手の立場に立って弁解する行為もみられた。会話例 5 は、J1 が J2 について普段よくものをこぼすことを言及する場面である。01-03 行で、昨日も 3 時間の間に 2 回ぐらいこぼした行動を指摘している。しかし、J1 は、10 行では、実験室が「狭いのもある」と相手の立場から弁解して話しているのがみられる。

[会話例 5] J2 のよくこぼす行動

- 01 J1: → 昨日もなんか: すごい短時間のときに、3時、[3時間の中で
02 J2: [3時間のとき
03 J1: → なんか2回ぐらい[こぼしたよね:
04 J2: [hhhhhhhこぼした。
05 J2: あのね: さっきも::
06 J1: うん
07 J2: 一人であの実験室にいる間 ¥ こぼした ¥
08 J1: h[hhhhhhh
09 J2: [hhhhhhhhh 水こぼしてる。
10 J1: → ま: 狭いていうのもあるよね:
11 J2: 狭いけど: ま、(XXXXXX)

(3) 取り上げた否定的な側面に対して、自分もそうであることに言及する

相手の行動や性格について否定的評価を行った後、そのような行動や性格を自分もしたり、持っていたりすることを述べる行為である。次の会話では、J3 が J4 について、女性の前で黙ってしまうことをからかう場面である(01 行、05 行)。これに対して、J4 が初対面の女の前は苦手だと認めると、J3 は、07-09 行で「自分も女の前で苦手」ということと「自分がシャイ」であることを表明している。否定的な側面を取り上げるが、自分もそのような性格を持つことを述べ、相手との共感や共通点を持つことを示している。

[会話例 6] J4 の性格

- 01 J3: → いや、T(J4のあだ名)は女性の前でだまっちゃうかな: だって、結構。
02 J4: だまっちゃうよ: hhh
03 J3: °XXとか: °
04 J4: え、そんなことあったっけ?
05 J3: → いや、だからこの前のあれもそうじゃないですか、Mネ工(共通の知人)も。
06 J4: あ:: あれはね、初対面の女の人は苦手なんです。
07 J3: → ま、俺も苦手、[俺も苦手ですよ:
08 J4: [すごい苦手。 うん
09 J3: → 俺シャイやもん。

(4) 否定的側面の解消・改善

相手の過去の印象などについて否定的評価を行った後、そのような否定的側面が現在は解消されたことや、改善されたことを言及する行為である。例えば、次の韓国語の会話例 7 では、K2 が初対面に K1 のパーマ姿を見て、年より老けて見えたことを 01 行で言及し

ている場面である。パーマ姿は似合わなかったが、03行で、K2は、その後パーマをとって現れたときは、人が違うように見えたと述べ、前の否定的側面が改善されたことを言及している。このように、否定的側面が過去のことであり、現在はそうでないことを言及し、マイナス面を打ち消すストラテジーが日・韓共通でよくみられた。

[会話例 7] K1のパーマ姿

- 01 K2:→ 나는 언니가: 나이가 훨씬 더 많은 줄 알았잖아, 파마하고 와서:hh
K2:→ 私は お姉さんが 年が すごく もっと 上に 思えたよ. パーマかけてきて: hh
- 02 K1: 실수였어.
K1:ミスだった.
- 03 K2:→ 크래서 파마를 갑자기 풀고 나타났니까. 현
K2:→ で パーマを いきなり とって 現れたら、ほっと
- 04 K1: 십 년은 젊어 보여.
K1: 十年は 若く 見える.
- 05 K2:→ 사람이 왜 이렇게 다른거야?
K2:→ ひとが なんて こんなに 違うの?

(5) 他の側面をほめる

相手に対する否定的評価を行ったあと、現在話題となっている否定的評価の対象とは違う別の側面を肯定的に述べ、前に行ったFTAを補償するような行為もみられた。

次の会話例8では、K3が学期の初期、K4の噂について述べる場面であるが、K4が何か準備をしすぎて、他の人たちにXマン⁵のような否定的なイメージがあったことを指摘している。しかし、05行で、「そうだったけど、ま、初対面の印象はよかったよ」と話題を変え、初対面の印象は良かったことを取り上げている。このように、他の側面をほめることにより、遂行したFTAを補償するののも一つのストラテジーになるだろう。

[会話例 8] K4の噂

- 01 K3:→ 또 준비해왔다고 애들이 전부다 수군수군댔어. 재 엑스맨이다 막 이려고:
K3:→ また 準備してきたと 皆が こそこそしてた. あの子 Xマン(ゲームの鬼)だ とか 言って:
- 02 K4: 아: 진짜? 우리조, 그러니까, 우리조 애들이 다 엑스맨이라 그래가지고
K4: あ、ほんと? うちの組、だから うちの組の 子たちからも 皆 Xマンと 言われて
- 03 K3: hhhh
K3: hhhh
- 04 K4: 내기까지 했는데:

⁵韓国のゲームで、Xマンは、自分のチームの勝利を邪魔する役割を担っている。構成員はXマンが誰なのか知らないで、ゲームが終わるまで推測する。

- K4: 賭けまで やってたけど:
- 05 K3:→ **그랬는데 첫인상은 뭐 괜찮았지**
- K3:→ **そうだったけど、ま、初対面の印象はよかったよ**

(6) 自身の判断が正しいのか疑う表現を使う

否定的評価を行った後、自分が判断したことが正しいのか疑うような発話を発し、行ったFTAを和らげる場面もみられる。会話例9は、韓国語の会話であり、K9がK10に対して、しゃべり方が冷たいことを婉曲的に指摘する場面である。これに対して、K10が04行で「えー、そう？」といやがる反応を見せると、K9は即時「違うかな？」と、自分の判断に対して確信がないような表現を示す。

[会話例9] K10のしゃべり方

- 01 K9:→ 너는 근데 원래 말투가::대게 조곤조곤, 조곤조곤 해가지고:: **말, 풀리** 말투가
- K9:→ あなたは でも もともと しゃべり方が すごく きちんとして:: **しらなし**、しゃべり方が
- 02 K10: 그래서 차가, 조곤조곤은 안 차가워보여야 되는거 아니야?
- K10: **それで、冷た、きちんは 冷たく みえないんじゃないの？**
- 03 K9:→ 응, 말투가 따뜻한 말투는 **아닌거 같애.**
- K9:→ うん、しゃべり方が やさしい しゃべり方では **아니みたい**
- 04 K10: 어.....[그래?
- K10: **え..... [そう？**
- 05 K9:→ **[아닌가?**
- K9:→ **[ちがうかな？**

5. 日本語母語話者と韓国語母語話者の比較

今回の分析を通して、日本語母語話者と韓国語母語話者との違いが最もみられるところは、否定的評価後のFTA補償行為の種類であった。以下の表2にその頻度と割合を示す。

【表2】日本語母語話者と韓国語母語話者のFTA補償行為と出現頻度

FTA 補償行為	日本語母語話者	韓国語母語話者
(1) 否定的な側面の肯定化	5(22.7%)	3(20%)
(2) 相手の立場から弁論する	3(13.6%)	2(13.3%)
(3) 自分もそうだと述べる	5(22.7%)	0(0%)
(4) 否定的側面の解消・改善	5(22.7%)	5(33.4%)
(5) 他の側面をほめる	1(4.7%)	3(20%)
(6) 自身の判断を疑う	3(13.6%)	2(13.3%)
合計	22(100%)	15(100%)

FTA 補償行為の合計をみたところ、日本語母語話者が 22 回、韓国語母語話者が 15 回で、日本語母語話者の方がより多く補償行為を行っているのがみられた。

日本語母語話者と韓国語母語話者に共通に多かった戦略は、取り上げた否定的側面を打ち消すような戦略であった。例えば、(4)のように否定的側面が今は改善されていることを述べたり、(1)のように否定的側面に肯定的な側面もあるように述べたりする行為がそうである。マイナスであることがもう無くなったことを言及したり、マイナスをプラス方向に転換させたりすることで、前に述べた否定的な面を緩和させているのである。

日・韓で相違点として、日本語母語話者の場合、相対的に多かったのは、(3)の相手の否定的な側面を自分自身も持っていることを是認することであり、相手の否定的評価の後、自ら自分に対しても否定的に述べ、謙譲することによって、FTA を補償している様子である。

韓国語母語話者の場合、補償行為として自ら自分に対して否定的に述べることはあまり見られず、(5)のように他の側面をほめたり、(1)の否定的な面が肯定的な面もあることを言うなど、否定的評価の後、相手の肯定的な側面を取り上げる戦略を使うことで、FTA を補償させるような行為を行っていることがみられた。

6. まとめと今後の課題

以上、日・韓の各々の母語話者同士の会話から、否定的評価を発する際の伝え方と発した後の FTA 補償行為について分析した。否定的評価を発する際は、それが冗談・遊びであることを示すメタ・メッセージを送るため、韻律の操作、おおげさな表現、笑いが使われることがみられた。

さらに、否定的評価後の FTA 補償行為を分析したところ、日本語母語話者と韓国語母語話者とで共通に多かった行為は、行った否定的評価の内容を解消させたり、改善させるような行為であった。日本語母語話者と韓国語母語話者との異なる点としては、日本語母語話者の場合、否定的評価を行った後、自ら自身をへりくだることで、相手のフェイスを補償していたが、韓国語母語話者の場合、相手をほめることで相手のフェイスを補償する行為を取っていたことがみられる。

今回は、否定的評価後の FTA 補償行為の分析において、話し手側の補償行為のみに注目し、受け手側の行為には注目をしなかった。三牧(2008)では、FTA を遂行した側が補償行為を行うだけではなく、FTA を受けた側も相手に応酬するなどの FTA 行為を見せ、FTA バランスを保つ、「FTA バランス探究行動」の存在を指摘している。今後は、このような、FTA バランス探究行動に焦点を当てて分析したいと思う。また、両国の会話データ数が少なく、日・韓の比較を行うことに限界があった。今後は、属性を絞ったデータを増やし、質的な分析も踏まえ、日・韓のコミュニケーションの相違点をより明らかにしたいと思う。

【参考文献】


- 林始恩(2010)『親和的關係における否定的評価—日本人・韓国人の母語話者同士の会話から—』筑波大学人文社会科学研究所修士論文
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54・3 pp.117-132
- 大津友美(2007)「会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合」『社会言語科学』第10巻第1号、pp.45-55
- 笹川洋子(1997)「儀礼行為としての笑い—電話会話にみられる笑いを手がかりとして—」『親和國文』32 pp84-109 神戸親和女子大学
- 関崎博紀(2010)「言語社会心理学的アプローチに基づく会話の分析—日本人大学生同士の会話における否定的評価の対象の分析を例として—」『日本語教育研究への招待』くろしお出版、pp213-228
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社
- 中山昌子(1995)「親しさと冗談・からかいの表現」『日本語と日本語教育—阪田雪子先生古稀記念論文集』三省堂 pp.163-187
- 三牧陽子(2008)「会話参加者によるFTA バランス探究行動」『社会言語科学』第11巻第1号、pp.125-138
- 山路奈保子(2005)「〈相手を評価する発話〉についての一考察—日本語の「ほめ」と「けなし」をめぐって—」『比較社会文化研究』第17号、pp.109-115 九州大学比較社会文化学府
- Brown,P.&Levinson,S.C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, Cambridge University Press
- Zajdman,A. (1995) *Humorous face-threatening acts: Humor as strategy*. Journal of Pragmatics, 23, pp.325-339

【文字化データの記号】

J: 日本語母語話者

K: 韓国語母語話者

→ : 否定的評価の発話

→  : FTA 補償行為

. 語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオドで示される

, 音が少し下がって弾みがついていることはカンマで(,)で示される

? 語尾の音が上がっていることは疑問符(?)で示される

[複数の参加者の発する音声为重なり初めている時点は、角括弧([])で示される

[] 重なりの終わりが示されることもある

- = 二つの発話が途切れなく密着していることは、等号(=)で示される
- (XXX) 聞き取り不可能な箇所は、(XXX)で示される。空白の大きさは聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している
- 言葉 : : 直前の音が伸ばされていることは、コロンの数で示される。コロンの数は引き伸ばしの相対的な長さに対応している
- h 呼気音は h で示される。笑いを表すものにも用いられる
- 言葉 h 笑いながら発話が産出される時、そのことは、呼気を伴う音の後に h を挟むことで示される
- ¥ ¥ 発話が笑いながらなされているわけではないが、笑い声でなされることもある。そのときは、該当箇所を ¥ で囲む
- ↑ ↓ 音調の極端な上がり下がり、それぞれ上向き矢印(↑)と下向き矢印(↓)で示される
- ° ° 音が小さいことは、該当箇所が ° で囲まれることにより示される